

目白研心中学校・高等学校見学の感想

2018年12月20日に、東京都の目白研心中学校・高等学校を本校図書情報部のメンバー5名で見学してきました。以下はその感想です。参加した先生方の率直な感慨を生かすため、あえて原文のまま掲載致します。重複する部分も多く、読みにくい面も多々あるかと思いますがご容赦下さい。

今回の見学に際し、お忙しいにも関わらずお時間を割いていただいた目白研心中学校・高等学校の松下秀房先生、森岡浩希先生に御礼申し上げます。今回の見学を、本校の未来に繋げるよう努力してまいります。

主任 今中 俊久

秋吉 和紀（国語科）

約90年の歴史を有する、中高一貫教育を提供する私立の男女共学の中学校・高等学校。こちらで最も目を引いたのが「学習支援センター」である。学習塾と連携し、自習室にチューターが常駐し、生徒の学習指導にあたる。部活動後も開館していて、生徒の学習活動を学校内で完結させることができるようだ。

関大一中・一高には、放課後に生徒が自由に使用できる自習室がない。図書室、あるいは職員室前のスペースがその代わりとしての機能を果たしているが、落ち着いて学習に取り組める環境とは言い難い。

知育・徳育・体育の高度な調和を実現するには、放課後も生徒が自主的に学習できる環境を整備する必要がある。放課後の課外活動として、「部活動→自主学习」を個々人が計画的に実行できる環境が本校にもあれば、これも「学校の特色」として打ち出せるものになるだろう。

目白研心高校様への訪問を通して、「先生方の熱意」と「学校の特色」が学校の在り方を決めていく大切な要素であると感じた。学習支援センターでの取り組みと、勉強と部活動の両立等の特色をお持ちで、実践していく先生方の熱意がそれを生み出しているように思う。指導実践の検証と改善を繰り返し、今の環境をつくってこられたと思うと、その道のりは大変なものであったと想像してしまう。

本校にも、教員が「一高はこんなことをやっています」と共通して言えるような特色が必要であると痛感した。最後に、校務ご多忙の中、丁寧に対応して頂いた先生方、大変お世話になり、ありがとうございました。

上垣 尚吾（保健体育科）

目白研心中学校・高等学校の取り組みについて

○学習支援

- ・生徒がスタッフの方と相談の上、学習スケジュールを立て学習に取り組む環境がある。
- ・学習の習慣化

朝テストはすぐに採点、必要な生徒には当日再テストし採点して補習に繋げる。わからないことをその日中に解決させる。

○Media Center の活用

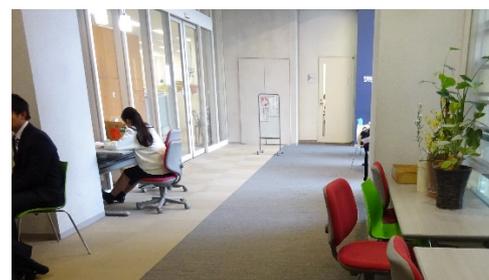
- ・コンピューターに支援ソフトを入れている。
数学ソフトなど（生徒が自由に使える）

○Learning area の活用

- ・質問や学習相談等、多面的に使われている。

○英語教育

☆海外の大学進学を目指す。



☆現代のグローバル化に対応する。

- ・ 中学～高校にかけて段階的な学習を行っている（表現力を鍛える）
- ・ 海外に特化した英語学習をしている（クラス別）
- ・ スピーチコンテストへの参加
- ・ 海外短期留学
- ・ 留学など実体験を通して、海外の生徒とふれあい、ハングリーさを身に付ける

○PDCA化（生徒の自己肯定感を促す）

・ 日誌を活用し、生徒自身が今取り組むべきことや身につけていくこと、これからの目標の再考等毎日ふりかえりを行なっている。

目白研心中・高等学校では英語教育に力を入れている。その中で、英語に対して生徒がチャレンジできる制度や体験できる機会がたくさん準備されていた。

また、日誌の活用などで、生徒自身が自分の目標や一日のふりかえりを行うことで教員側からではなく生徒自身で努力できていないことや足りていないことを取り組めるように工夫していた。そして、学習面で足りてないところを相談できる態勢や学習スケジュールを一緒に立ててくれる支援が整っていることで、生徒が自ら勉強しようと思う学環境があった。

川崎 久理子（保健体育科）

目白研心中学校・高等学校では、次世代スキル型という特殊な入試を実施し、論理的思考力・推理力・計算力を問う筆記試験と思考力・判断力・表現力を問うグループワークを入試の中に取り入れている。そこでは、学力試験からは見えないすばらしい能力を見つけることができる。

次に、SEC（スーパーイングリッシュコース）という英語力に特化したコースがあり、ただ英語を勉強するだけでなく、異文化を理解することや英語でディスカッションをしたり、スピーチできる表現力などを身につける教育がなされている。

最後に、学習支援センターが設置されている。朝テストが行われると、その日のうちに採点し、返却と補習まで行われている。外部委託されたチューターが補習を行っている。他にも授業の復習や受験対策などさまざまなプログラムが行われている。予備校や塾に行かなくても学校のなかですべて完結させることができる。

瀬野貴之（国語科）

目白研心中学校・高等学校では「環境を与えて自主性・内発性を高める」こと「自己肯定感を高める」ことに力を注いでおられた。環境面として特徴的なのは学習支援センターである。外部業者に委託する形で、様々なニーズに添った学習支援を行う施設を学内に設けておられる。自習室も自由席ではなくセンターから指定された席に着席させる、宿題のための使用は禁止など、セルフマネジメントを促すような仕掛けをしておられるのが印象的であった。また、中学生は「セルフマネジメントノート」によって自らの課題発見に努め、教員はそのノートに対しコメントを書く際に自己肯定感につながるように配慮するなど、学校全体で芯の通った方針を貫かれているようだった。

また、中学入試に新たな試みとして算国を組み合わせた試験やグループワークを行わせる「次世代スキル入試」を導入されることを決定されており、生徒募集の段階で強く学校のカラーを出されている。これからの学校としてどのような人材を育てていきたいのかという明白な方向性が感じられた。

私自身が教壇に立っていて感じるのはやはりこの「自己肯定感」「セルフマネジメント能力」が弱い生徒が増えてきていることだ。SNSなどで「繋がっている」ことを重視するあまり、みんなと同じ考えや行動をすることが

正しいとされ、「個」としての意識は弱まっているように思う。みんなに合わせて行動しても、自己肯定感もセルフマネジメントも生まれてこないのは明白だ。そこにフォーカスした目白研心中学校・高等学校の方針は、この時代において、ますます重要なものになっていくであろう。